



LAYANG LAYANG

3-4月の出来事

パーム油工場排出物を活用したビジネスモデル発表

プロジェクトで考案された、パーム油工場排出物を活用するビジネスモデルを発表するワークショップが、3月20日から3回行われました。続く試験プラントの視察には、日マの企業から約70名が参加しました。環境に悪影響を与えずに経済に貢献できるビジネスの可能性について活発な意見交換がなされ、活動成果の社会での活用実現に一步近づくことができました。



サバ州コタキナバルでのワークショップとケニンガウ郊外プロジェクトサイトでの試験プラント視察

「生物多様性保全のためのパーム油産業によるグリーン経済の推進プロジェクト」 期間：2013/11 - 2017/ 11 マ側機関：マレーシア・ブトラ大学

自閉症の人たちが暮らしやすい社会をという願いをこめて



スライムづくりを指導するJICAボランティア

浴衣体験を楽しむ福祉関係者

4月1日にケダ州で自閉症啓発イベント

「Walk For Autism」が開催されました。福祉分野のボランティア4名が参加、自閉症児や地域住民を対象にしたイベントと教材の展示を行いました。自閉症児への療育・遊びの一つとしてスライムづくりを紹介、地域の子どもをはじめ、学校や福祉関係者が熱心に作り方を学びました。異文化交流として行った浴衣体験も帯のリボンが可愛いと好評でした。

(株) スーパー・フェイズ社の技術を活用した環境改善

2015年から開始された家庭ごみの分別回収で大きな問題となっているのが“紙おむつ”です。高齢化や女性の社会進出に伴い紙おむつの利用は大幅に増加、一方で分解に時間が掛かり、埋立処分場に大きな負荷を掛けています。この問題の解決のため、使用済み紙おむつをペレット燃料化し、エネルギー資源としてリサイクルする技術の活用に関する調査が始まっています。



紙おむつ燃料化の機械を設置予定の廃棄物処理施設と排出される紙おむつの回収を想定する幼稚園の視察

「使用済み紙おむつリサイクルシステム案件化調査」 期間：2016/10-2017/9 マ側機関：廃棄物管理公共清掃公社

MJITキャリアフェア 多くの学生と真剣な企業で会場に熱気



高い日系企業への関心
立ち並ぶブースが賑わう

マレーシア日本国際工科院（MJIT）では、毎年「MJIT キャリアフェア」として、学生と企業のマッチングの場を設けており、3回目となる本年は4月23日に開催されました。162名の学部4年生を含む300名近い学生が参加、日系を中心に29社の企業が出展しました。当日は朝から多くの学生が詰めかけ、みな熱心に各企業のブースで話を聞いていました。具体的な職種、勤務条件を持って、その場で面接を実施している企業もあり、学生、参加企業の双方にとって良い機会となったようでした。

「マレーシア日本国際工科院整備 事業附帯プロジェクト」 期間：2013/7-2018/7 マ側機関：マレーシア工科大学

サバ州でSATOYAMAイニシアティブ地域会合開催を支援

4月18～19日、サバ州コタキナバルで、アジアで二度目となるSATOYAMAイニシアティブ*地域会合が行われました。この地域会合は、JICAがこれまで14年間ともに活動してきたサバ州自然資源事務所が誘致し実現したもので、日本をはじめとしたアジア各国の専門家や行政官、NGO等が集まり、里山・里海の重要性や保全への取り組みについて活発な議論が行われました。



村人の生産した手工芸品を
州政府大臣に説明する
JICAボランティア



2日目の体験型の視察
観光客が触れられるよう
餌付けされた魚

※2010年、愛知県での生物多様性条約締約国会議で日本政府が提唱した自然資源の持続可能な管理・利用、自然共生社会の実現を目指す取組み

「サバ州を拠点とする生物多様性・生態系保全のための持続可能な開発プロジェクト」 期間：2013/7 - 2017/6 マ側機関：サバ大学、サバ州政府

その他のニュース「南南協力」他

- 革新的で創造的な南南協力へ向けて（2017年3月1日）
<https://www.jica.go.jp/malaysia/office/information/event/170301.html>
- パンフレット「マレーシアにおける南南協力支援 2016年度」（英文）（2017年3月23日）
<https://www.jica.go.jp/malaysia/office/information/event/170323.html>
- 天皇皇后両陛下が、帰国したシニア海外ボランティア、日系社会シニア・ボランティアとご懇談
https://www.jica.go.jp/topics/2016/20160408_01.html

トピックス

マレーシアの将来と日本の役割：既存技術・知識の現地化を超えて

マレーシアの人々は、あるお手本があれば、これを基に上手に現地の事情に合うように手を加え、使うことができます。例えば、カイゼンという生産性向上の取り組みでは、日本のカイゼンの技術をマレーシアの文化に合うように工夫を加えて取り入れ、今ではアフリカの国々にも教えています。独立以来、貪欲に海外から技術や知識を学び、目を見張る発展を遂げたばかりのことはあります。このため、マレーシアでは、不足する技術を日本から教えてほしいという声もまだ多く聞かれます。

しかし、マレーシアも、先進国入りが視野に入ると、このようなお手本を基にした現地化だけでは国の発展に対応できなくなりつつあるようです。他の先進国と対等に競争できるようになるには、自分たちがお手本を創り出すことが求められます。このため、マレーシア政府は技術革新と創造性を大変重要視しており、どこへ行っても、この二つの言葉を見かけるようになりました。国民に発想の転換を促しているのです。このような中、先ほどの「日本に学びたい」という声に、JICAはどう応えるのか。もちろん、日本人としてはうれしくはありますが、その一方で、長い目で見て本当にマレーシアという国の役に立つことなのかということまで考えれば、そのやり方には工夫が必要でしょう。また、日本がお手本を示す先生でマレーシアが生徒といった関係ではもはやなくなっているというのは、現地での肌感覚として、ひしひしと感じられることです。では、どうすればよいのでしょうか？

私は、最近のマレーシアの方とのやり取りを通じて、不足する技術や知識を補うといった発想ではなく、日本とマレーシアがそれぞれ持っているものを合わせ、全く新たなものをつくりだすことが、将来の両者の関係を見据えれば、必要であると思いました。そういえば、そんな兆しも見えてきています。マレーシア投資開発庁（MIDA）は、製造だけでなく研究拠点をつくる企業に対する投資優遇措置を取っており、日系企業も参加しています。また、世界銀行は、昨年、調査研究拠点を首都クアラルンプールにつくり、新たな知見の発信を頻繁に行っています。

先進国入りを控えた国に対する協力は、これまでの援助の概念の延長ではなく、根本的な発想の転換を以て、援助そのものの在り方にまで切り込むことができる可能性を秘めていると感じます。マレーシアはその最先端の一翼を担っていると言えるのではないのでしょうか。

(JICAマレーシア事務所 中澤繁樹)

JICAマレーシア及びニュースレターのバックナンバーはこちら→ <http://www.jica.go.jp/malaysia/index.html>

JICAホームページはこちらから→ <http://www.jica.go.jp/>

配信(追加、停止等)に関するご希望、ご意見、ご要望など → ms_oso_rep@jica.go.jp

JICA Malaysia Office

Level 29, Menara Citibank, 165 Jalan Ampang 50450 Kuala Lumpur Malaysia

Tel: 603-2166 8900 Fax:603-2166 5900 E mail address : ms_oso_rep@jica.go.jp